

「この人に検査してもらいたい」と患者さんから言われる視能訓練士に

「幼い頃から視力が弱く苦勞したので、大人になったら同じように困っているみなさんの助けになりたいと思っていました」。そう話してくれたのは、帝京大学医療技術学部、全国でも数少ない視能矯正学科で勉強中の学生のひとり。視能矯正、という言葉には馴染みがないかもしれませんが、眼科検査を受けた経験は誰にでもあるはず。その検査を行う視能訓練士を養成するのが、この学科なのです。「以前は子どもたちの斜視や弱視を訓練する、わりと特殊な職業だったのですが、視能訓練士が眼科の一般検査も担当するように法律が改正され、近年広がりをみせている分野です」。学生たちから厚い信頼を寄せられる松岡久美子先生は、そう説明してくれました。授業では検査技術を学ぶため、視力検査の器具や眼圧を測る測定器、立体視検査用のパネルなど、さまざまな機器を使った実習が行われます。授業について尋ねると、学生たちは口を揃えて「楽しい」とひとこと。「患者さんの体に関わる責任のある仕事なので、何事にも真剣に向きあわなければならない部分は大変ですが、勉強をすればするほど夢の医療従事者に近づく実感があるので、楽し

さの方が先立つのかもしれないかもしれません」。取材で驚いたのが、授業後も教室に残り、友達同士で自主的に機器の使い方を練習している学生が多いこと。同じ目標を持った仲間だから、お互いに相談したり、刺激を受けあったりすることも多いそうです。松岡先生に、視能訓練士として学生たちに心がけてほしいことを聞いてみました。「患者さんの立場に立つことですね。そこではまず、人が好き、という姿勢が大切です。もちろん技術的な正確さも必要ですが、それ以前にひとりの人間として真摯に患者さんへ接してほしい。検査は人がするもの。決して機械的なものではありませんから」。例えば「どちらが良く見えますか？」と聞かれる検査など、被験者の口頭での答えから結果を引き出す自覚的な検査では、質問の仕方ひとつで回答のしやすさが変わってくるもの。視能矯正学科では、そんなコミュニケーションの手法も、教育の一環として教えています。視能訓練士は、まだまだ人数が足りていないと言われる分野。近い将来、どの病院でも視能訓練士による正確な検査が受けられ、よりよい治療につながる時代が来るよう、その実現に向けて学生たちは日夜勉強に励んでいるのです。

feel TEIKYO 

あなたにつながる帝京大学 撮影・市橋織江



帝京大学 本部大学PR推進室
TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします

帝京大学のあれこれを充実のコンテンツと心地よい写真で紹介する冊子「feel TEIKYO」を配布中。特別付録は大宮エリーさんの書下ろし小説です。請求先→ post@med.teikyo-u.ac.jp (本部大学PR推進室)